慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	文学から言語へ : アントワーヌ・ ファーブル・ ドリヴェにおける起源への問いと母なる言語(1)
Sub Title	De la littérature à la langue la question de l'origine et de la langue maternelle chez Antoine Fabre d'Olivet (1)
Author	國枝, 孝弘(Kunieda, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2009
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.49/50 (2009.) ,p.29- 50
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	Mélanges dédiés à la mémoire du professeur OGATA Akio = 小潟昭夫教授追悼論文集
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20091225-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

文学から言語へ

アントワーヌ・ファーブル・ドリヴェにおける起源への問いと母なる言語（1）

國　枝　孝　弘

1. アントワーヌ・ファーブル・ドリヴェの歴史的位置づけ

アントワーヌ・ファーブル・ドリヴェ Antoine Fabre d'Olivet（以下ファーブル）は、1767 年、南仏のガンジュ Ganges に生まれた。生家は、プロテスタントの裕福な織物業を営んでいた。フランス革命の余波で、家業は没落するものの、本人は幼いときから、家を継ぐための上級子弟の教育を受けてきた。しかし父親の意向とは反対に、本人は詩作や音楽に強く惹かれ始める。やがて文学に打ち込むことになるのだが、大きな成功をおさめたとは言い難い。40 歳になるころから、その著作は次第に神知学 théosophie やいわゆるオカルティスム的傾向に染まってゆく。著作は、多岐にわたり、音への興味から聾の治癒についての論を書き、ピタゴラスの黄金詩篇への序論を書き、またヘブライ語を人類の始源の言語とする『復元されたヘブライ語』*La langue hébraïque restituée*[1] を書き、さらには神知学の観点からの人類史『人間の社会的状態について』*De l'état social de l'homme*（改題『人類の哲学史』*Histoire philosophique du genre humain*）[2] を書いている。

こうした経歴から 19 世紀初頭の神知学者として名前が挙げられることが

1）Antoine Fabre d'Olivet, *La langue hébraïque restituée*, Paris, Eberhart, 1815, (reprint, collection Delphica, Edition l'âge d'homme, 1999.)

2）Antoine Fabre d'Olivet, *De l'état social de l'homme*, Paris, Brière, 1822, (reprint, Paris, édition Traditionnelles, 1979, 1991)

あるが、実は南仏の文学や言語の復興にあたってきた人々の中では、ファーブルはトゥルバドゥールの詩編を編み、南仏語の復権のための言語論を書いた人物として評価されてきた。まず 1803 年にトゥルバドゥールの詩撰集『トゥルバドゥール、13 世紀のオクシタン詩集（以下『トゥルバドゥール』と省略）』*Le Troubadour*, *poésies occitaniques du XIII*^{e} *siècle* を出版する[3)]。そしてその約 15 年後に、出版には至らなかったが『復元された南仏語（以下『南仏語』と省略）』*La langue d'oc rétablie* を執筆している[4)]。本稿で検討するのは、この南仏語に携わったファーブルである。

ファーブルの著作は、今ではほとんど顧みられることがない。それは彼の書いたものが「学問」の体裁を呈しておらず、現在からみれば「言語の夢想者」[5)] が書いた珍書としか分類されえない印象が拭えないからだ。また当時においても晩年は出版の費用も得ることができず、ほとんどが草稿のまま残され、本人は失意のうちにこの世を去っている。このような文学者未満、言語学者未満の人物をそもそも検討するのは、どのような理由からなのか。それをまず明らかにしておきたい。

なぜファーブルなのか。まずファーブルとそれまでのトゥルバドゥール詩の発掘や、南仏語の辞書の編纂にあたってきた学者たちと大きく異なるのは[6)]、ファーブルの言語についての探究は、南仏語だけに限られていなか

3）Antoine Fabre d'Olivet, *Le Troubadour*, *poésies occitaniques du XIII*^{e} *siècle*, Paris, Henrichs et Renouard, 1803 (Lacour/Rediviva, 1997.)

4）Antoine Fabre d'Olivet, *La langue d'oc rétablie*, Ganges, Editions David Steinfeld, 1989. *La Langue d'oc rétablie*. *Grammaire*. Edition, avec une préface et des notes, par Georg Kremnitz, Wien, Braumüller, 1988. 引用は 1989 より。

5）Marina Yagello,『言語の夢想者』*Les fous du langage*（Paris, Seuil 1984, nouv. éd. 2006 sous le titre *Les langues imaginaire*）のタイトルより。ただしそれ以外にも、たとえば Claude Hagège は *L'homme de paroles*（Fayard, 1985, Folio essai 2002）の第四章 « Ecriture et oralité »（書記と口述）のなかで、『復元されたヘブライ語』のなかに文字、および文字によって表された文学を持つ言語を高貴な、聖なる言語とみなす思潮を指摘している。

6）南仏地域における文学の概略については Charles Camproux, *L'Histoire de la*

った点である。実際にファーブルは、ヘブライ語の起源研究を行っている[7)]。もちろん、これは当時の言語起源論の影響を受けた、普遍言語についての夢想的ともいえる著作であり、神知学的な思想もかいま見られるが、少なくとも、ファーブルが言語についての当時の思潮を自分なりに解釈し、言語探究を志した点は、南仏語だけを取り上げていた郷土の知識人と大いに異なると言ってよい。19 世紀全体の言語思想の流れを考えたとき、ファーブルを単に南仏文学史の枠組みだけに閉じ込めることはできないだろう。

同じ南仏の出身であり、ほぼ同時代のフランソワ・レヌアール François Raynouard とファーブルの違いはどこにあるだろうか。前者はフランス、ロマン語研究の第一人者であり、19 世紀後半にガストン・パリス Gaston Paris やポール・メイエ Paul Meyer によって、言語学的観点からはその価値をほとんど否定されることになるが、ドイツのロマン語研究者からは文献学的な意味で、すなわちトゥルバドゥールの文学テキスト、あるいは公文書などを今で言うコーパスとして用い研究を行なったという意味で、「先駆者」として評価されている。すなわち、レヌアールは、たとえその後引き継がれることはなかったとしても、文献学という「学問」の規範のなかで語られうる「研究者」である[8)]。このレヌアールの業績と比較するとき、ファーブルにとっての南仏語は客観的な研究対象というよりも、決して切り離すことのできない自己の一部であるかのように思える。『トゥルバドゥール』は、一見トゥルバドゥール詩を集めただけに感じられ、そして『南仏語』では言語を叙述対象として客観視しているかのようにみえる。だが、その一方で、若い時に南仏語で詩を書き、そして著書の随所で、南仏語が自分の母語である

---

littérature occitane, Paris, Payot, 1971 を参照のこと。

7）ウンベルト・エーコの『完全言語の探求』平凡社、1995（Umberto Eco, *La ricerca della lingua perfetta nella cultura europa*, Roma-Bari, Laterza, 1993）では、19 世紀になっても、あいもかわらずヘブライ語が人類の普遍言語であると主張した人物がいたとして、引き合いに出されている。

8）Cf. *De François Raynouard à Auguste Brun. La contribution des Méridionaux aux premières études de linguistique romane*, *Lengas*, *Revue de socionlinguistique*, 42, 1997.

ことを強く意識していた形跡がみられるのだ[9)]。

この「母語」意識は彼の生い立ちに深い関わりがある。父親は将来自分の商売をつがせるための修行としてファーブルをパリやドイツに旅行させている。その目的の一つは商業言語のマスターである。ファーブルの母語は、本人の言に従えば、南仏語であるが、すでに 11 歳でパリに出されフランス語を学んでいる。南仏の上層ブルジョワ階級として教育を受けたファーブルにとって、フランス語はほとんど完璧に使いこなせる言語であり、実質的には南仏語との二言語併用者であったはずだろう[10)]。それだけではなく、パリでは英語を学び、またドイツを旅行しながら、ドイツ語も修めている。すなわち父親の世界における言語とは流通のための言語であり、商売という目的のための道具であった。ファーブルにとっては相手に応じて数カ国語を使い分けるために学ばされた商業言語である。一方、母の世界における言語とは南仏語である。母から離れてパリに暮らすファーブルが、父親のあとを継ぐという人生の進路に沿うことを拒否し、故郷と自分の本性を見つめたときに見出したものが母なる言語である[11)]。

9）たとえば、フィリップ・ガルディ Philippe Gardy はファーブルの南仏語に対する起源 origine とそこからの離別 exil が、『トゥルバドゥール』の作品のモチーフになっているとして、彼の言語意識と作品との親和性を論証している。Philippe Gardy, « L'œuvre poétique occitane d'Antoine Fabre d'Olivet : sujet littéraire et sujet linguistique », in. *L'exil des origines*, Presses universitaires de Bordeaux, 2006.

10）本人の言に依れば、子供時代は南仏語の環境で育てられている。しかし、その後故郷を 2 度にわたって離れたファーブルは今の言葉で言う「バイリンガル」の子弟であり、人生のほとんどはフランス語の環境であった。*La langue d'oc*, p. 15. « c'est ma langue maternelle, et la seule que j'aie parlée jusqu'à l'âge de dix ans ».

11）作家として出発をしたときに、Fabre は母方の性である Olivet を付け、以後 Fabre d'Olivet として作家活動をすることになる。作家であることと、母なるものの融合がここにも示唆されている。フィリップ・ガルディも母親という存在が、人間と文化、言語を結びつける表象であることを指摘している。しかし本論では、最終的に言語が母親と取り結ぶ関係と、文化と取り結ぶ関係とは異なることを主張し、ガルディとは異なる結論を提出したい。cf.

父なる言語と母なる言語の対立の構図を象徴するフランス語と南仏語について、ファーブルは、その『回想記』*Mes souvenirs* の中で、ひとつのエピソードを語っている[12)]。それはフランス革命が最も激しい時期、ある場所で知り合った無神論を主張する人物に対して、反駁ができなかったときのことである。家に帰ったファーブルは、なぜ真理を所有する自己の思想を言葉として相手に伝えられないのかと自問する。ファーブルは当時持っていた英語版の聖書に手を置いて、その一節を開く。ヨブ記 37 章である。その詩句にうたれたファーブルはそこに込められた教えをフランス語の詩にしようとする。しかしフランス語ではうまくいかない。「人工的であまりに規則正しい」フランス語では、またそのフランス語がもつ詩の形式では、この聖書の教えがもたらす熱情は訳すことができないとわかる。そこでファーブルの脳裏によみがえってきたのが、当時彼が収集していたというトゥルバドゥールの詩句である。こうしてファーブルは、南仏語によって La Poudestad de Diû（La puissance divine）という南仏語詩を完成させる。つまりここでファーブルはフランス語にはよそよそしさを感じる一方で、南仏語には情熱がこめられた魂のことばを見出すのだ。詩の言語としての南仏語、自らのアイデンティティを構築する南仏語。これがファーブルの出発点である。

この意味で、ファーブルの言語観は、言語への意識が自らの「個」を形成するよりどころになるという意味において、またフランス語の中における修辞法の規則の閉塞状況にたいする抵抗という意味において、ロマン主義的な思潮を早い時期から象徴するものであるとは言えよう[13)]。とはいえ、後

Philippe Gardy, « Fabre d'Olivet et l'écriture de la langue maternelle », in. *L'exil des origines*, *op.cit*.

12）Antoine Fabre d'Olivet, *Mes souvenirs*, introduction et notes par Gilbert Tappa et Claude Boumendil, Nice, 1977, p. 277.

13）むろん、レヌアールも言語の変化を外在的な政治的、歴史的状況によると考えている以上、ドイツの言語学派とは異り、ロマン主義的な言語観にのっとっている。また中世の再評価というロマン主義の胎動の時代の中に生まれた学者であることも明らかである。しかし、バッジオーニも指摘するように、

述するように、彼の南仏語論は、こうしたロマン主義的な問題意識にとどまるものではない。さらに言うならば南仏における南仏語擁護の伝統と、ロマン主義的魂の目覚め、そしてのちにつながる言語そのものへの問いかけ、それらが、未熟な形であるとはいえ、豊かに交錯しているのが、このファーブル・ドリヴェという人物なのである[14)]。

2. *Le Troubadour*, *poésies occitaniques*（1803）の出版とその時代

ファーブルの文学（詩）に対する興味は早く、1787 年、20 歳のときには南仏語で詩作品を編もうとしていた事実が、その一編である *Força d'amour* の草稿が発見されたことで明らかになっている[15)]。上記に述べたように、フランス語にも秀でたファーブルだが、ここで文学言語として南仏語を選んでいることが注目に値する。ファーブルはその序文で、「たとえ衰退し、落ちぶれたとはいえ」[16)]、かつてのトゥルバドゥールの言語と、現在話されている言語は同じであると、言語の連続性を強調しているのだ。と同時に、ファーブルが求めているのはあくまで詩的言語＝美的規範としての南仏語である。ファーブル研究の第一人者ロベール・ラフォン Robert Lafont によれば、ファーブルは、17 世紀末のゴドラン Godolin のような詩人の作品を読み、その詩のなかに「立派なことば beau langage」を見出し、それを自らの作品

彼の中には文学をコーパスとしてみる意識があった。ここにはすでに文学を民族の魂の表象とするロマン主義的文学観を抜け出し、文献学へと移行する地点にレヌアールがいたことを示している。cf. Daniel Baggioni, « Raynouard et sa postérité : les rendez-vous manqués de la linguistique romane française avant sa professionnalisation "parisienne" », in. *Lengas*, 42, 1997.

14）本研究は『トゥルバドゥール』と『南仏語論』の両方を対象とし、言語に対するファーブルの思考の変化を起源への問いから母なる言語への移行として考察をするものであるが、紙幅の関係から、本論では起源への問いとしての『トゥルバドゥール』のみを考察対象とし、母なる言語として理解される『南仏語論』については別の機会にゆずりたい。

15）« Força d'amour (1787), poème inédit. Texte établi et présenté par Chritian Anatole », *Revue des langues romanes*, LXXIX, 2, 1970, p. 325−375.

16）*Ibid*., p. 340.

の典拠としていた[17]。ここで確認したいことはファーブルの意識が南仏語にあったとしても、その南仏語は詩によってプレスティージュを与えられた言語であるという点である。

1799 年にはファーブルの著作がパリで初めて出版される。小説『アザライスとジャンティアマール、プロヴァンスの古文献から翻訳されたプロヴァンスの物語』*Azalaïs et le gentil Amar*, *Histoire provençale*, *traduite d'un ancien manuscrit provençal* である。この作品の冒頭で、ファーブルは南仏語で書かれた昔の草稿をフランス語に翻訳したものであるとことわりを入れているが、ここですでに「翻訳の体裁で出された創作」という次作品でも使われる偽作行為のほのめかしがされている点が注目に値する。内容はアルビジョワ十字軍を背景とし、騎士道精神を持った主人公の戦いと恋愛、トゥルバドゥール的な歌の情景、そして同時代的な暗黒小説的モチーフも取り入れたりと、様々な意趣がこらされている。かなりの成功作となったことからみて、当時の読者の嗜好に合致する作品であったと言える[18]。

1803 年にはトゥルバドゥールの詩撰集『トゥルバドゥール』の第 1 巻が、翌年には第 2 巻が出版される。その中心をしめる『ローズとポンス・ド・メイリュイスの恋』*Les Amours de Rose et de Ponce de Meyruis*[19] と『愛の法廷』*La Cour d'amour* はフランス語のみで、それ以外の短い詩編はオック語とフランス語の対訳によって書かれている。中世の文学的栄光であるトゥルバドゥール詩を集めた作品と称されてはいるが、大半はフランス語で書かれており、フランス語話者に向けて書かれた書物であることは明らかであり、さらに出版された時期が 19 世紀初頭であるということから、この作品集が、郷土史的な目的で書かれたものではまったくなく、当時のフランス社会におけるロマン主義初期の中世趣味の流行に素早く呼応して編まれたものだと言

17）Robert Lafont, « Fabre d'Olivet, L'Ossian d'Occitanie », in. *Amiras/Repère*, 2. avril 1982, p. 47.

18）Léon Cellier, *Fabre d'Olivet. Contribution à l'étude des aspects religieux du romantisme*, Paris, Nizet, 1953, p. 65−67.

19）内容は、前述の Força d'amour の翻案である。

えるだろう[20)]。

例えば、ファーブルについて初の本格的な研究を手がけ、その成果を博士論文にまとめたレオン・セリエ Léon Cellier は、ファーブルを「新たなマックファーソン」Le Nouveau Macpherson と呼び[21)]、ロベール・ラフォンはその作品群を「オクシタン地方のオシアン」と呼んでいるように[22)]、トゥルバドゥールを発掘するということは、スコットランドの民謡を発掘したオシアンの発見と同じ意義を持っている。すなわち、中世の文学作品に、自らのよってたつ文化的なアイデンティティ、根拠を見出すという意味がある。そしてもうひとつ、ファーブルがマックファーソンと称される別の理由がある。それはファーブル自身も、序文にその名前を出して述べている通り、マックファーソンが見つけたのは、当時の文学作品の断片であり、マックファーソン自身がそれに手を加えたように、ファーブルも同じく編集、加工、脚色を施しているという点である。

ただし、マックファーソンの場合は、ヨーロッパで少なからぬ読者が正真正銘のテキスト群が発見されたことを疑わなかったのに対し、ファーブルは、自らの「偽作行為」la supercherie をかなり意図的にほのめかしている。Rescondut なる人物を登場させ、この人物から受け取った草稿が、すでにそ

20）ただし、Charles Camproux によれば「トゥルバドゥールの再発見」という言い方は、正確な言い方ではない。カンプルーは、南仏では中世の詩の伝統が忘れられることのなくずっと生き続けており、ロマン主義的思潮がこのオック語の古い文学の発見のきっかけになったのではなく、オック語地域における昔の文学にたいする一貫した興味が、ロマン主義を生むひとつの契機になったと指摘する。確かにファーブル以前にもトゥルバドゥールの伝統を引き継いでテキストを編纂した人物たちはいた。しかしラフォンの言うように、ファーブルは、トゥルバドゥールの詩を、フランス語とパリという文化的文脈の中で紹介したのであり、その受容層にとっては、まさにスタール夫人の北方文学の賞揚と同じ意味で、南仏文化を復興することがロマン主義的趣味をかき立てるものであったと言えよう。Charles Camproux, *Histoire de la littérature occitane*, *op.cit*., p. 135. Robert Lafont, *op.cit*., p. 45−55.

21）Cellier, *op.cit*., p. 83.

22）Lafont 前掲論文のタイトルより。

の時点において「並べ直され、まとめられて」しまっていたと主張する。少なくとも今ここで確認しておきたいことは、それまでのトゥルバドゥール詩を編纂していた学者のように（実際に彼らも加工をしているとはいえ）、編纂、収集をして古典を残すことが第一義ではなく、また、それ以後の原典批判を行なっていく学者たちとも異なり、トゥルバドゥールの詩作品を南仏語を分析するための「原典資料」と位置づけているのでもない。やはり当時の読者の嗜好を意識しての作為であると考えられる。序文においても、前述の *Les Amours de Rose et de Ponce de Meyruis* が翻訳という体裁をとったのは、当時の読者層が創作を望まなかったためと言及されている[23)]。とはいえ、ではこの詩撰は、当時の中世リヴァイヴァルにあわせた流行の書に過ぎないのだろうか。

この作品集を読み解くために考えたいのが、ファーブルにおける〈母＝南仏語＝文学〉の意識である。先ほど述べたように、ファーブルにとってフランス語と南仏語は、前者が人工的で規則性のある理知の言語であり、後者が情熱を表現する感情の言語であるという意味で対立する言語であった。しかしファーブルが南仏語を魂と感情という情意に結びついた言語としてとらえているとしても、このロマン主義的な言語観は、微妙な含みを残している。自らの起源である南仏語を問う過程において、その起源が母と土地に結びつくことは確かに自然である。しかし、この二つの対象に対するファーブルの感情は一様ではない。母という現在の南仏語を話す存在への思慕と、トゥルバドゥールを生んだ栄光の過去をもつ土地への思慕の違いである。ともに自らがよって立つ起源でありながらも、この二つの対象へのファーブルの思いについては、微細に検討しなくてはならない。

たとえばファーブルは、『回想録』*Mes souvenirs* の冒頭で、自らの子ども時代を回想し、その記憶が母と郷土に結びついていることを述べる[24)]。しかし、ファーブルは母と郷土を、それらにむけられる感情の違いによって区別をしている。母への想いは、affection native（生来の情愛）と呼ばれる。

23）*Le Troubadour*, p. ii.
24）*Mes souvenirs*, p. 3.

これは、私たちの体にしみこんだ、私たちの一部として体感される想いである。そして「母なることば」idiome maternel とは、私たちが意識することなく、気づいたときには話し始めているという意味で、やはり私たちの体感といってもよい言語である。そしてこの言語は魂に響く歌のようであり、喚起力に富む言語であるとファーブルは言う。このように affection（情愛）は個人の心に根ざし、魂に触れ、そして郷愁を喚起する感情である。それにたいして土地への思慕は、amour de la patrie（郷土愛）と、amour（愛）という別のことばで表わされている。この感情は、体で感じるものというよりも、むしろ道徳的なものであり、外面的であるという意味で、政治的、宗教的な熱狂と結びつきやすいとされる。これを言語に敷衍するならば、郷土を表象する言語とは、郷土の民族性や精神性という共同体的意識に結びつく言語であり、その表象は文学という言語表現様式によって具現化されると言ってよいだろう。

ファーブルは常にこの二つを厳密に区別していたわけではない。『回想録』のなかでも、一箇所、母と郷土の両方に対して、affection native が使われている[25)]。しかし、母なる言語と郷土の言語という二つの参照軸でファーブルの作品を読むとき、私たちは、『トゥルバドゥール』から『南仏語』への移行を、ファーブルがこの二つの根本的な違いに気づいてゆく過程として分析することが可能であると思われる。以下この点を具体的に検証してゆく。母の言語とトゥルバドゥールの言語。この問題系列に沿って、まずは『トゥルバドゥール』の献辞、序論、論考の 3 つのパートを分析する。

3. *Le Troubadour*, *poésies occitaniques*（1803）言語の起源／文学の起源

献辞――母なる言語とトゥルバドゥールの言語

献辞の冒頭に記されたことばは A MA MERE（私の母へ）である。ファーブルはこの詩撰を母親に捧げるとしている。なぜならば、母親こそ、フランス語の素養もあり、かつ、ファーブルによれば、南仏語の中でもっともト

25）*Ibid*., p.6.

ゥルバドゥールのことばに近いとされるラングドック方言の話し手である母親は、自身の翻訳の正しさを判断してくれる最良の人と言えるからである[26)]。ファーブル自身にとってこの母なる言語は、先ほど述べた体感としての言語である。母親の「口から」受け取り、母親の「胸に抱かれて、私のか弱い唇が最初の音を出した」ことばである[27)]。学校でフランス語を学び、それが物事を考えるという知的活動の道具となった今でさえ、母が歌ってくれた歌が心によみがえってくるとファーブルは述懐する。母と歌はまさに言語の情意性の象徴である。

ファーブルの言語と文学への意識を考察する上で注目したいのは、母の話す南仏語が、かつて文化的栄光をもたらしたトゥルバドゥールの詩の言葉を今もなお忠実に守っているとされる点である。つまり、母によって象徴される現在の南仏語と過去のトゥルバドゥールの言語が真っすぐにつながっているのだ[28)]。それは、ひとつには中世と今現在という時間による隔たりがつなぎあわされるという意味において、ふたつめには詩的言語と南仏の人々が日常的に使っている言語の距離がつなぎあわされるという意味においてである。

ファーブルにとっての 1803 年当時は、フランス革命期の騒乱によって、父親の家業が没落し、社会の変動のなかで衰退の一途をたどることを余儀な

26）*Le troubadour*, p. iii. « (...) à l'usage habituel du dialecte languedocien, celui de tous qui se rapproche le plus de l'idiome occitanique, tu joins une connaissance parfaite de la langue française (...) ». なお、引用では現代フランス語の観点からみて、綴り字の異なる単語がいくつかみられるが、すべて原文のままとした。

27）*Ibid*., p. i. « C'est toi qui m'as rendu ce langage si cher, puisque c'est de ta bouche que mon coeur en a reçu les premiers élémens, et que c'est sur ton sein que mes lèvres débiles en ont appris les premiers sons. »

28）*Ibid*., p. i.「あなた（＝母）は。トゥルバドゥールたちの故郷に生まれ、他の場所に移ってその故郷を棄てることなく、かつての言葉に忠実であり続け、決してそれを、トゥルバドゥールの継承者たちの尊大な言語のために犠牲にしようとしなかった」。« Toi, qui, née dans la patrie des Troubadours, ne l'as point abandonnée pour aller habiter dans d'autres climats, et qui, fidelle à leur langage antique, ne l'as point sacrifié au langage orgueilleux de leurs successeurs ».

くさせられた時期である。そのような時期に母、家族、郷土が、過去の栄光によってせめて照射され、時間や社会の階層といったものも無化される、そんな思いを抱いたとしても、確かにおかしくないだろう。

序論

ルソーを連想させる情緒に根拠を置く言語意識と[29)]、母なるものへの憧憬によって綴られた献辞であるが、実際にトゥルバドゥールの詩的言語についての考察に入る序論では、こうした無時間的な同質の空間ではなく、過去と現在の断絶、過去の栄光と現在の没落の対比が強調されることになる。ファーブルは、手元にあるトゥルバドゥール詩がオリジナルであることの証明として、現代人には、ここまでトゥルバドゥールの「才と言語」を復元することは不可能であると言う[30)]。13 世紀と 19 世紀の距離は大きく開いていくことになる。

その距離とは、過去のトゥルバドゥールによってヨーロッパ全域に広められた言語の覇権と、今ではほとんど振り返る人もいなくなった言語の衰退の距離である。

> （トゥルバドゥール）の言語は、今でこそ、南仏のわずかな農民たちにゆだねられ、セヴェンヌ地方の最も小さな町の住人でさえ、そうしたことばを使うのに赤面してしまうようなありさまだが、当時は、詩の生まれようとしていた精髄によって、ヨーロッパの大多数の人々に愛でられた言語となったのである[31)]。

29）Jean-Jacques Rousseau, *Essai sur l'orgine des langues*, Amsterdam, Marc Michel Rey, 1755. Gallimard , Collection Folio/Essai, 1990. ジャン・ジャック・ルソー『言語起源論』白水社、1986.

30）*Le Troubadour*, p. X.「現在の人間がこれほどまでにトゥルバドゥールたちの才と言語に知悉していることは不可能である」。« il était impossible qu'un moderne eût possédé à ce point la connaissance de leur génie et de leur langue ».

31）*Ibid*., p. XIV. « Leur langage, aujourd'hui abandonné à quelques paysans

この引用からわかるように、南仏語はかつて詩という形式によって言語としての完成をみたにもかかわらず、現在では農民だけしか使わない、落ちぶれた言語として蔑まれているというのがファーブルの認識である。しかも、ファーブル自身、現在では無知なる農民が話す形の崩れた patois（俚言）に過ぎなくなってしまっていると言う[32)]。ここにはかつては最高の詩的形式性をそなえていた南仏語が、現在では屈辱的な地位に成り下がってしまっているという言語のヒエラルキーが存在している。この距離が献辞とは異なり、ファーブルを断絶された過去へと向かわせる。

具体的に詩という言語形式はどのように栄光を実現したのか。ファーブルはミヨー Millot の『トゥルバドゥールの文学史』*L'histoire littéraire des Troubadours* を引用しながら、その栄光を語る[33)]。イタリア、スペイン、イギリスなど広汎に渡った地理的な影響力ももちろんだが、それぞれの土地で、南仏語の詩が実際に作られたという事実がそれを物語る。「ラングドック」（langue d'oc）という共通の文化圏の形成とは、詩的形式を完成させた言語が、ヨーロッパにあまねく広がったことを指しているのだ。文学的に最も洗練され、彫琢された言語が威光をもってヨーロッパを照らし出すのである。

また、ミヨーの著作では、文学の起源の問題が扱われていることが注目に値する[34)]。ミヨーは、現在の文学の起源はプロヴァンスの地にもとめられ、

---

du midi de la France, et dont les habitants des plus petites villes des Cevennes, rougiraient de faire usage, devint, grâce au génie naissant de la poésie, la langue chérie de la plupart des peuples de l'Europe ».

32）*Ibid*., Tome II, p. 261.

33）L'abbé Claude Millot, *L'histoire littéraire des Troubadours*, Paris, Durand, 1774. ただしミヨーは、必ずしもトゥルバドゥールを全面的に評価する立場を取ってはいない。いわゆる「暗黒」と形容される不毛なる中世ヨーロッパにおいて、はじめて文芸形式を生み、近代ヨーロッパ文学の礎になったのが南仏のトゥルバドゥール詩であることはあきらかである。その意味で南仏がヨーロッパの精神を進歩させたことは認めている。しかしながら、その詩作品はときに冗長であったり、常套句の羅列でがあったりと、必ずしも趣味のよいものではなく、適宜削除を行なったと述べている。

34）*Ibid*., p. LXXV. « L'origine de la littérature moderne est donc en Provence,

ヨーロッパの暗黒時代はトゥルバドゥールの出現によって終わりを迎えたと述べる。この終わりが、近代文学の起源である。起源がこの地点である以上、ミヨーの考察は、トゥルバドゥールがなぜ生まれたかという、さらに先の問いにまではほとんど遡及しない。せいぜいが先住民族の女性崇拝の風習を示唆する程度である。ミヨーにとっては、南仏の起源は、あくまで輝かしい文化を作り上げたトゥルバドゥールの詩であり、そこから歴史が始まっているのである。

ファーブルが、ミヨーの論旨にのっとって、トゥルバドゥールの出現を理解していることは間違いないだろう。たとえば、次のようなくだりである。

> ミヨー：トゥルバドゥールがヨーロッパを致命的な冬眠状態から救い出したのだ[35)]。

> ファーブル：トゥルバドゥールが人々を致命的な冬眠状態から救い出したのだ[36)]。

このようにファーブルは序論を書くにあたって、ミヨーのトゥルバドゥール＝近代文学の起源をほとんど踏襲していると言える。起源という威信がまずは力説される。

次の栄光の根拠は、言語そのものに関わる。ここでもファーブルはミヨーをほとんど抜粋と言ってよいほど踏襲している。

> ミヨー：南欧はラテン語から俗語を引き出し、我々は今日、それらの俗

---

c'est à dire dans les provinces méridionales de la monarchie française. »「近代文学の起源はしたがって、プロヴァンスに、すなわちフランス封建制度における南仏の地方にあるのだ」

35）*Ibid*., p. LXXVI. « Les troubadours ont tiré l'Europe d'un fatal engourdissement. »

36）*Le Troubadour*, « (Les troubadours) tirèrent le peuple de son fatal engourdissement. »

語が、各地方で、フランス語、イタリア語、スペイン語として完成しているのをみている。プロヴァンス語は、同じ源から派生し、他の言語に圧倒的に秀でている。それはプロヴァンス語が、長い間マルセイユの言語であった、ギリシア語の美しさを引き継いでいるからであり、その言葉を美化する能力をもった人々によってより早くから培われたからでもある[37)]。

ファーブル：フランス語、イタリア語、スペイン語と同じように、ラテン語から派生したプロヴァンス語は、そのライヴァルに秀でている。それは、ケルトの語をより多く保持しているからであり、長い間マルセイユで話されていた、ギリシア語の美しさを引き継いでいるからである[38)]。

このファーブルが引用した箇所は、後述するように、論考（la dissertation）で述べられる南仏語の歴史とは食い違っている。また 1820 年に編纂される『南仏語』に、『トゥルバドゥール』は組み込まれるのだが、その際には削除されている箇所である。また、論考での考察の方が南仏語の歴史をつまびらかにしていることからも、序論の重要度は低いと言えなくもない。そもそもミヨーの南仏語の起源の説明は、この 5 行足らずでほとんど全てである。ただ、そのような箇所をファーブルはなぜ引き写しているか

37）Millot, *op.cit*., p. LXX. « Le midi de l'Europe avait tiré du latin les langues vulgaires, que nous y voyons perfectionnées aujourd'hui, le français, l'italien et l'espagnol. Le provençal, dérivé de la même source, l'emportait incontestablement sur toutes les autres soit qu'il participât à la beauté du grec, qui fut longtemps le langage des Marseillais, soit qu'il eût été plus tôt cultivé par des talents capables de l'embellir. »

38）*Le Troubadour*, p. XVII. « Dérivée du latin comme le français, l'italien et l'espagnol, elle [=la langue provençale] l'emportait sur ses rivales, en conservant beaucoup plus de mots celtes, et en participant aux beautés du grec, qu'on avait long-tems parlé à Marseille. »

を考えなくてはならない。

その理由は、南仏語の他のロマン語に対する文化的優位性の確立のためということにつきている。その根拠は、ケルト系のことばが今でも残っているということと、ギリシア語の美しさをたずさえているということに過ぎず、その根拠をどれだけファーブルが確信していたのかは定かではない。だが、それでもこの箇所をわざわざ写したのは、郷土の栄光をここでは歴史的にはるか昔に遡ることによって、さらに高めたいという意図があったためではないだろうか。

そもそも、ミヨーはトゥルバドゥールを積極的に評価しているわけではない。彼らは近代文学を興したとはいえ、ようやく野蛮な時代を抜け出したばかりの素朴な段階にとどまっており、ヘレニスムの文学的伝統を知らなかったのである。その意味でトゥルバドゥールたちは到底ギリシア人には比肩すべくもないとミヨーは考えていた[39)]。こうしたミヨーの立場ははっきりしているにも関わらず、ファーブルはそれには言及せず、トゥルバドゥールの礼賛の言辞だけを書いたのである。

これら一連のファーブルのトゥルバドゥール評価の意図を考えるならば、それは l'amour de la patrie に連なるものだと言える。自らの郷土の歴史を必要とあれば古代ギリシアまで遡り、また別のところでは、近代詩の起源としてトゥルバドゥール詩を位置づける。ここからは、ヨーロッパの文化的ヘゲモニーを南仏に取り戻そうとする、文化復興の姿勢が明確に浮かんでくると言えよう。

論考

序論に続く論考では、より詳しく南仏語の誕生と、その栄光と衰退の歴史が描かれる。言語の歴史といっても、それは言語の内在的な変化の問題ではなく、文化的、政治的、社会的な外在的な変化の意味である。そして論考でファーブルが依拠するのが、17 世紀前半のトゥールーズの学者ピエール・

39）Cf. Robert Lafont, « Le Midi des troubadours », in. *Romantisme*, 1982, Volume 12, Numéro 35, p. 35.

ド・カズヌーヴ Pierre de Caseneuve の *Obros de Goudelin*（1713）である。

ファーブルの（つまりはカズヌーヴの）、ヨーロッパ社会の歴史と政治的状況による言語の歴史を説明を簡単に追うならば、次のようにまとめられる。ガリアの土地にいた民族は、フランク民族の侵入後もラテン民族の習俗と言語の影響を保ち続けた。フランセと呼ばれるのは、文字通りのフランク民族と、ラテン系の民族の二民族であり、前者はゲルマン語を、後者はラテン語とケルト語の混じり合ったロマン語を話していた。ロマン語は俗ラテン語と呼ばれた。王たちはいわゆる二言語併用者であったが、その後ルードヴィッヒ 2 世王とシャルル禿頭王の誓い（ストラスブールの誓約）によって、ロマン語はフランスのみで使われるようになり、ゲルマン語はドイツで使われるようになった。そして王の宮廷がエクス = ラ = シャペル（アーヘン）からパリへと移されることによって、フランス北部にゲルマン的な要素が持ち込まれ、ロマン語とはいいながらも現実的には性質の異なる第三の言語が生まれた。これがオイル語である。したがって、オイル語すなわちフランス語はあくまでもロマン語が変質したことによって生まれたわけで、現在のオック語の北部におけるひとつの変種に過ぎないのである。

以上概観したように、1803 年当時のファーブルの言語観は、民族の移動や王権に関わる政治的な出来事によって言語が変化するという社会言語的な考えにのっとったものであった。そして序論との矛盾をいとわず、このカズヌーヴの叙述に依拠するのは、南仏語は、他のロマン諸語に対する droit d'aînesse（長子権）[40] を持っているという主張のためである。

> したがって、私がオクシタニック語と呼ぶところの、このオック語、ないしはプロヴァンス語は、我々の第一代、第二代の王の種族のもとでフランスで使われた真正のロマン語であり、ロワール川以降、スペインの国境からイタリアの国境までにわたり、まったき純粋性をもって維持された言語である。したがって、この言語が、フランス語、スペイン語、

40）*Le Troubadour*, p. XXVIII.

イタリア語の共通の幹であることは否定できない[41)]。

ファーブルにとって南仏語とは、ロマン語の「純粋性」を保ち続けた言語であり、地理的にも南ヨーロッパを広く覆っていた言語である。とりわけ重要なのは、南仏語こそが、フランス語、スペイン語、イタリア語の源流であるという点である。それをファーブルは tige（幹）という語で言い表している。俗ラテン語がロマン諸語に分化していったのではなく、俗ラテン語から南仏語を経たあとに、ロマン諸語へと分化したという考え方は、もちろんカズヌーヴだけではなく、18 世紀において南仏語の復興を願っていた学者たちに広く受け入れられていた考え方である[42)]。当時の学問的思潮にのっとって、ファーブルは、南仏語の文化的優位性を訴えているのである。

ファーブルが主張する南仏語の文化的優位性の第二の根拠は、トゥルバドゥールによって詩的言語として完成された南仏語という性格づけである。ここまで外在的な要因にたって言語の変化をとらえてきたが、次は、文学言語という言語の質の洗練を問題にする。

他のヨーロッパ地方は野蛮な状態のなかで疲弊し、現在その地域で話されている言語は、当時はまだ形も整わない崩れたことばに過ぎなかったのに対し、プロヴァンス地方はすでに調和のとれた詩人たちを生み出

41）*Ibid*., p. XXI. « Il est donc incontestable que cette langue d'oc, ou provençale, que j'appelle langue occitanique, est la véritable langue romance usitée en France sous la première et la seconde race de nos rois, qui s'est conservée dans toute sa pureté au-delà de la Loire, depuis les frontières d'Espagne jusqu'à celles d'Italie : et qu'ainsi on ne peut nier qu'elle ne soit la tige commune du français, de l'espagnol et de l'italien ».

42）たとえば、アシャール Achard が同じ考え方をしている。さらにこの南仏語起源説はレヌアールまで引き継がれていき、1830 年にディエーズ Diez によるレヌアールへの抜本的批判によってようやく終焉を迎えた考えである。ちなみにカズヌーヴは南仏語をロマン諸語の「株」cep であると言っている。cf. Brigitte Schlieben-Lange, « Préhistoire de la romanistique : la contribution des Méridionaux avant Raynouard », in. *Lengas* 42, 1997, p. 31.

していたし、オクシタン地方のことばは厳密な規則に従っていたのである。北の人々が無駄な言辞を繰り広げてはいるが、近代詩にとって不可欠な飾りである音律は、オクシタン地方で生まれた、あるいは少なくとも完成されたと言えるのである[43)]。

ここで着目したいのは、言語の完成が何によって達せられるかという点である。それは、詩人の出現、そして詩の創作によってもたらされた厳密な規則の定着によってである。つまり、言語は何にもまして詩によってその質が高められ、そして詩は規則を生むことによって言語を完成に導くということである。そしてその完成の根拠となるものは脚韻である。

ファーブルは、脚韻のような音楽性は、音楽的感性に恵まれた南仏であったからこそ生まれたのであり、近代文学の誕生はこの脚韻の存在によって告げられたのだと言う。なぜならば、脚韻こそが、ギリシア、ラテン詩に匹敵する文学言語の形成に寄与したからである。

近代詩は、（ロマン語）に脚韻の調和を負うている。これがギリシア、ラテン詩の韻律に取って代わり、対抗するのだ[44)]。

ラテン文学が消滅してから初めて、詩の想像力と優美さが展開され、脚韻の使用において新たな魅力を生み出した言語[45)]。

43）*Le Troubadour*, p. XXXII. « Lorsque le reste de l'Europe languissait dans la barbarie, et que les langues qui y dominent aujourd'hui, n'étaient encore que des jargons informes, la Provence avait déjà produit des poètes harmonieux, et l'idiôme occitanique s'était asservi à des règles sévères. Il est prouvé, malgré les vaines prétentions de quelques peuples du nord, que la rime, cet indispensable ornement de la poésie moderne, est née dans l'Occitanie, ou du moins s'y est perfectionnée ».

44）*Ibid*., p. XXXV. « la poésie moderne lui [=langue romance] doit l'harmonie de la rime, qui remplace la cadence des vers grecs et latins, et rivalise avec elle. »

45）*Ibid*., p. XLV.« (...) une langue enfin, où se déployai[en]t pour la première

ここでも起源の問題が浮かび上がる。近代文学の起源が韻律の存在によって告げられることの意味は、ギリシア・ラテン詩の規範には我々はもはや従属しないということである。つまりヨーロッパの起源はもはや古代ギリシア・ラテンにまで遡る必要はなく、むしろ南仏こそがその起源となるという認識である。

そしてファーブルは、古代ギリシア・ラテン文学の規範から脱却した近代文学の様式を完成させたのは、フランス語ではなく、南仏語であると強調する。12、13 世紀には韻を含む規則を完成させた南仏語に対して、フランス語が規則を遵守し始めたのは 15 世紀末であり、フランス語は、南仏語に影響を受け、ようやく古典的な詩を完成させるに至ったのである。南仏語こそ、最初に建てられた「芸術的な構築物」(l'édifice des arts)[46] と呼べる言語であり、トゥルバドゥールこそその「発明者」(inventeurs) なのであり、フランス語の詩人はその「模倣者」(imitateurs) に過ぎないのである[47]。

以上の考察から、ファーブルのこの時期における言語意識を次のようにまとめることができるだろう。

ひとつは、言語とは文学言語に他ならないという意識である。言語に完成があるとするならば、それは美的な文学言語において完成するという考え方である。そしてこの考え方は、文学を文化の精髄とし、その文化的優越性を鼓舞しようとする、民族地域主義的な動きにつらなる。ファーブルのことばを再び用いるならば、l'amour de la patrie（郷土への愛）であり、18 世紀の北フランス、パリにおけるフランス語、およびフランス文化の優越性とその普遍性の言説に対して、南こそが文化的（文学的）優越性を持っているのだ

---

fois depuis l'extinction des lettres latines, le pouvoir de l'imagination et les grâces de la poésie et qui offrait un charme nouveau dans l'emploi de la rime. »

46）*Ibid*., p. XLVI.

47）*Ibid*., p. LIII. ここには、18 世紀を通した北フランスと南フランスの脚韻をめぐる覇権争いの議論がおそらく反映されているのだろう。北の学者は、南仏語からフランス語が派生したことだけではなく、脚韻も南仏語起源であるという説に反対していた。cf. Jean Stéfanini, *Un provençaliste marseillais, l'abbé Féraud(1725−1807)*, Ophys, 1969, p. 250.

という主張にそのままつらなるものである。この枠組みにおける言語への意識は、当然ながら、言語と文化を等質に語る議論とはなっても、言語そのものを考察の対象とすることには結びつきようがない。

もうひとつ言えることは、文学言語の完成は脚韻によるという意識である。古典文化と切り結ぶ近代ヨーロッパ文学の起源として、トゥルバドゥールの文学の成立を挙げることができるのは、それが脚韻を生み出した文学形式であるからである。『トゥルバドゥール』の巻末には語彙論が収められているが、言語自体の考察は、修辞学、詩論のなかに収まってしまっている。

ファーブルはトゥルバドゥールの衰退についても、今述べた文化的優越性と修辞に原因があるとしている。まず修辞についていえば、形式が固定されると同時に、さらにそれとは異なる奇をてらった文飾に走る詩人たちが出てきたとする。そして文化的優越性が保てなかった理由としては、南仏をひとつにまとめうる共同体、北の王権による中央集権化に対抗できるような「共通の中心」（un foyer commun）を形成できず[48]、小君主が分立するばかりであった政治体制にもとめられるとする。ここでファーブルは、言語がたとえ詩的に完成の域に達したとしても、それが国家という体制と結びつき、その威光を他国にひろく及ぼすことなしには、結局は衰退してしまうのだと指摘する。いくら文化的優位性を保っていても、それが国家としての政治的な独立性を併せ持たなくては、結局は同化されてしまい、栄光も忘れ去られてゆくのである。

このファーブルの指摘は、単に中世への嗜好にあわせたトゥルバドゥール恋愛詩の発掘ということにとどまらず、やがて本格化する民族主義の胎動を感じさせる。すなわち、言語と文化によって起源を画定し、その過去と同一性をはかることによって国家、あるいは共同体の神話をつくってゆく運動である。文学は、政治的、国家的に見た場合、民族の同一性を保証する優れた文化装置である。しかもファーブルはその文化装置をガスコーニュ、プロヴァンス、ラングドックといった郷土史的に限定された地域ではなく、南仏全

48）*Ibid*., p. XLVIII. « Les provinces méridionales n’offrirent jamais un foyer commun ».

体の単一性へと広げてゆき、18 世紀の南仏の作家、学者とは異なる新たな視野を提出した[49)]。その意味で、革命期から始まる共和主義的な動きの中で、南仏の文化の威光をかかげ、地域の固有性を守るために抵抗運動を続けることになる 19 世紀の南仏の知識人、文学者の嚆矢としてファーブルを位置づけることは十分可能であろう。

しかしそれは同時に、ファーブルが « l'amour de la patrie » と呼んだ、道徳的、政治的な次元においてしか言語を考えていないということである。ここで私たちは、献辞で見られた言語のもうひとつの面、情愛の対象としての母なる言語が消えてしまっていることに気づかないだろうか。母の声たる体感の言語、今も聞こえてくるはずの生の感触としての南仏語はいつのまにか消えてしまってはいないだろうか。すなわち、時間を遡り、過去と現在の精神的同一性をはかるヴェクトルはあっても、今ある言語、母が話す言語そのものへの意識は 1803 年のファーブルの頭には存在していない。たとえ、南仏語の復興という意識があったとしても、それが文学作品による詩的言語という意味での過去の栄光の復興とすり替えられてしまっている以上、このときのファーブルに生きている言語そのものへの意識はほとんど芽生えていなかったと言えよう。言語について考えることは、文学について考えることであり、言語の洗練について考えることだったのである。

49）Fritz Peter Kirsch, « Langue et littérature », in. *Petite histoire sociale de la langue occitane*, Cap al Sud, 2002, p. 152.